

在住外国人のための日本語学習及び日本文化理解促進について

静岡大学教育学部 杉崎ゼミ (研究室)

指導教員：教授 杉崎 哲子

参加学生：田中 潤、堀江陽介、田中宏樹、坂下卓巳、永島知稀
河野克海、須山奈美、田端美帆、高橋 萌、鈴木麻友

1. 要約

これまで杉崎ゼミでは、普通学校の児童生徒、特別支援学校や授産所で働く人々、外国人留学生等、様々な人を対象に、継続的に「書制作」の機会を提供してきた¹。それらの実施の際に、「話し言葉と書き言葉の両方を組み合わせた表現活動」としての展開を心掛けてきたところ、単なる書制作の体験で終始するのではなく、言葉や語彙の獲得にとって有効に機能したことを確認した²。また、毛筆によって「自分の思いや伝えたい言葉を書く」という活動が感性の醸成や心の解放に寄与することも明らかにした³。

そこで、市内在住外国人に対する生活相談や児童生徒への教育支援に力を入れている焼津市の方針に共感し、これまでの実践の成果を生かして焼津市の多文化共生事業に貢献したいと考えた。具体的には、参加者全員が「書」や「言葉」で交流できるイベント「書カルタで交流しよう！」を開催することである。

新型コロナウイルスの感染拡大の状況によって、幾つかの変更を余儀なくされたが、リモートによって細やかな個別対応が可能になり、小規模ながらも楽しく実践することができた。集って行うイベントの企画と併せて効果的なオンラインの活用を検討し、今後を生かしていきたい。

2. 研究の目的

焼津在住の外国人に対して、以下のことを実現し、日本語学習の意欲向上や日本文化の理解を促進する。

- ・焼津の自然や暮らし等の画像によってイメージを膨らませながら関連する話題の諺を知り、親しみを持って日本語を学ぼうとする。
- ・毛筆を使用して諺の最初の漢字を書くことによって、漢字書字への抵抗感を軽減して学習意欲を高める。
- ・大学生や参加者同士の交流によって、日本語での会話を楽しむ。

3. 研究の内容 (当初の計画)

「焼津市在住の外国人の日本語学習の状況調査などの課題の洗い出し」、「焼津市内の自然や産業、文化など『読み札 (短文)』作りの題材集め」については、関係部局と調整する。情報収集、意見交換等の連携によって「市の行事とのコラボレーションの検討」という流れで行い、焼津市には、会場の確保や広報を依頼して、以下のイベントを実施する。また、実施後には、その結果を分析して、今後の課題を明確にする。

<イベント当日の流れ>

- ① 焼津の自然や暮らしなどの画像と諺とを関連づけて紹介し、文字を身近なものとしてとらえる。
- ② 日本の伝統的な遊びである「カルタ」について説明する。
- ③ 焼津の自然や文化を題材にして「読み札」を作成する。
- ④ 「読み札」の最初の文字 (言葉) を「毛筆 (絵具使用)」で書く。= 「書かるた (取り札)」
- ⑤ 「書カルタ」を楽しんで交流する。

4. 研究の成果

(1) 実際の内容

B：新型コロナウイルス感染拡大に伴う焼津市の判断で、当初の予定を状況に応じて変更していった。

●変更/その1 (当初計画からの変更①とその理由及び対応策、結果)

- ・市の行事とのコラボレーションを予定していたが、情勢の変化が大きく他部局とは連携できなかった。
➡ 市の担当者の方が、協力を要請し承諾を得られた人 (事業所等) のみに参加してもらうことにした。
- ・年齢問わず焼津市在住の外国人を対象にした異年齢交流を想定していたが、小中学校では一斉休校が解除

された後も学校行事の中止という状況が続いていたため、技能実習生を対象に実施することにした。

- ➡ 実施（12月20日予定）に向けて、ミャンマー人技能実習生に対するヒアリング（聞き取りゼミ生がメモ）により日本語能力の実態や興味関心を把握した。

10月4日（実習生5名、通訳の方、焼津市の方2名、ゼミ生2名、杉崎／和田公民館）

<ヒアリングの結果>

- ・実習生のうち1名の女性はN3合格を目指して勉強中ということだったので、ある程度、日本語を話せるはずだが、通訳の方がいて男子実習生もゼミ生2名も男子だったので緊張していたのか、日本語では話してくれなかった。他の実習生（男子4名）は、来日してからは日本語を積極的に勉強している様子が見られず、12月実施の検定（N4）も受検しないとのことだった。
- ・後半少し表情が和んだが、勤務地の周辺での実習生同士の交流が中心の生活だからか、とても来日から2年経過したとは思えないほど日本人との会話に消極的であった。
- ・好きな漢字は「花、木、畑、牛、上」で、いずれも、理由は「書きやすいから」であった。
- ・来日してからは、日本語を学習する機会がないということだった、

- ➡ 漢字を取り扱いながらも漢字学習への抵抗感を軽減し、語彙を増やすために、工夫する必要がある。
 - …簡単な漢字で始まる「諺」を拾い出し、それを題材にして「取り札」を書いてもらうことにする。
 - …毛筆で書く際、時間的な制約の中でも字形を整えて書きたいという要求を満たすために、「かご字」に字形や筆使いのポイントを書き込んだワークシートを準備する。
- ・焼津市内の自然や産業、文化等に関連した「読み札（短文）」作りの題材集めは、ゼミ生と一緒に市内散策をして行う予定だったが、実施が困難な状況のため、市の広報誌の画像を使用させてもらうことにした。
- ➡ PPTのスライドに焼津の地図を載せ、漢字に合う画像を選んで地図上に添付することによって、参加者に焼津の風景等が伝わるようにした。
- ・参加者の生活に身近な内容の諺を選び出し、興味を持ってもらえるよう、意味を説明する資料を準備した。
 - …それぞれに、英訳とミャンマー語訳を付した。英訳の際には、直訳だと意味が分かりにくい。諺本来の意味を英語にするのが難しかった。ミャンマー語訳は、ミャンマー人の知人に依頼した。

●変更/その2（その後の変更②とその理由及び対応策、結果）

- ・応募用のチラシを作成し、焼津市が記者会見をしてくれる運びになっていたが、新型コロナウイルスの感染状況をふまえ「書カルタで交流しよう！」のイベントは中止となった。そこで、試験的に「オンライン懇親会（zoom）」を実施した。
- ➡ 12月20日／焼津3か所：技能実習生7名（ベトナム人1名、中国人3名・2か所）、静岡内3か所（ゼミ生7名）／市よりiPad貸与
 - ・簡単な表現でやり取りしたところ、ベトナム人実習生とは、通訳の方を介さなくても会話ができた。実習生が一人だったからかもしれない。特にアニメやサッカーなど、興味や関心を寄せている話題では会話が弾んだ。
 - ・同じ場所から複数名が参加したグループでは、日本語は単語で少し話す程度で、すぐに中国語での会話になってしまった。音声聞き取り辛い等、オンライン上の問題かもしれない。
 - ・中国人実習生2名のうちの一人はN3合格者だが日本語学習に前向きで、来日後は勉強の場がないことから、積極的に日常生活の中で会話できる、こんな機会が増えてほしいと願っている。
 - ・こちらが話すときは画面に顔を寄せ、真剣な顔で日本語の質問を聞き取ろうとしてくれていた。年明けにイベントを実施する旨を伝えたところ、皆、楽しみにしていると言ってくれた。

【オンライン懇親会（12月20日）】



●変更/その3 (変更②からの変更③とその理由及び対応策)

技能実習生は集団生活をしているため、オンラインであっても一カ所に集まっての活動は実施できない。

➡ 学習支援の方々の協力により、外国人児童生徒に対して「書カルタ」の活動を提案することになった。

「書カルタを作って遊ぼう」(オンライン)

令和3年1月13日 16時~17時 (幼児・児童・生徒10名、ゼミ生8名) /市がPC持参

- ・事前に「毛筆(絵の具)で漢字を書く」ための用具・用材一式を会場に届けておいた。
- ・30種挙げてあった「ことわざ」のうち、小学生向けに18種を精選し、活字を大きくして資料を用意した。
- ・1時間内で「毛筆で書く活動」と「書カルタで交流する活動」を行うため、効率よく進められるように、「毛筆の手本」と字形や筆使いの注意を書き込んだ「かご字ワークシート」を準備した。
- ・PPTを使って焼津の自然や暮らしと「漢字」とを結びつけ、活動の手順についても示すようにした。
- ・「カルタ」では、子供たちが書いた「漢字」ではなく、「印字した取り札」を使うことにした。

(2) 実績・成果と課題

コロナ禍で変更を重ねながらも、焼津市の担当者の方が関係各所に協力を呼び掛けてくれたおかげで、「書カルタ」による交流が実現した。札を取り合う「カルタ大会」の実施が目的ではないため、感染予防に努め「①参加者に取り札を分け、ゼミ生が漢字を読む。②その札を持っている子がカメラの前に差し出す。③その子が諺を言う。」流れで実施した。

参加者は、毛筆を使用して好きな色で漢字を大きく書いた後、学生が読む言葉を聞き取り、その漢字と、それで始まる諺をみんなに紹介した。学校で日本語を学んでいる子供たちは、技能実習生ほどではないが苦手意識を持っていることが多い。言葉として意味を捉えながら文字を書き、書いた文字を見て言葉を発する「目、耳、口や手を使う一連の動作」は言葉の学習に有効である。自分が「自分が書いた取り札の漢字」は決して忘れることなく、諺も覚えて使うことだろう。

オンラインによる不自由さはあったものの、参加者個々に対応できたのはリモート交流の利点でもある。ただ、外国人の人は、個人で通信環境を整えていないことが多いために活用が難しく、今回も市の機器を貸し出す方法によって実施が可能になった。この点が課題に挙げられる。

途中で通信に不具合が起ると、ゼミ生の一人が「きこえる？」と書いた紙を見せていた。また、子どもの声が聞き取り難い時には、漢字を書いた紙を見せて解答内容を確認していた。つまり、会話の中でも、適宜、文字情報を生かしていたといえるだろう。

ゼミ生は、「母国での正月の過ごし方が日本と大きく異なることを知り、好きな日本語とその理由を語ってくれた内容から、それぞれの人柄や個性が感じられて楽しかった。」「たとえ外国籍であっても、同じコミュニティの中で生活しているのだから、共通の話題(流行りもの)や共通の感覚(他言語を学ぶ難しさ、母国に対する思い)などを共有しながら、+αで私たち学生が知っている日本語の知識を伝えたい。」と感想を述べている。技能実習生と笑顔で会話し、画面越しに子供たちの様子を温かく見つめる学生の姿を見て、交流の重要性を再確認させられた。こちらから提供した取組みではあるが、ゼミ生にとっても意義深い経験であった。

(3) 改善点

今回、技能実習生には、「書カルタ」の実践は行えなかった。実習生の日本語学習の目的は日本での就業であり、講習を受けただけで身につけていない人も多い。しかし「多文化共生」とは、在住外国人を日本社会の



【焼津紹介・スライド(部分)】

構成員として捉え、多様な国籍や民族などの背景を持つ人々が、それぞれの文化的アイデンティティを發揮できる豊かな社会を目指すものである。「地域に住む人々に豊かな生活を営んでほしい」という焼津市の方の強い思いとゼミ生の前向きな気持ちに応え、この非常事態の収束後は、まず技能実習生に対して、市内散策やオンライン等での交流を取り入れて気後れなく会話を楽しめる土壌を作り、この取り組みを実施したい。



「児童の書いたことわざの漢字」(焼津)



「書カルタ」を楽しむ児童(焼津)



オンラインで交流(静岡大学教育学部)

5. 地域への提言

予測不能で仕方のない状況ではあったが、学生の活動も制限されている状況で進めていたため、もう少し早く実施決定の可否について連絡いただけるとありがたかった。杉崎ゼミでは早い時期からオンラインでの実施も含めて検討していたので、それに対して予め検討を進めていたら、もう少し広く募集できたように思う。

今回の取り組みは大々的な「イベント」の形にはできなかったが、オンラインを活用した気軽なミーティングであっても、日本人との関わりに変化が生まれ、日本語学習への意欲向上や日本文化の理解に結びつく可能性が示唆された。複数回実施できれば、無理なく継続的に日本語を学び続けられる有効な支援になるだろう。

もちろん、日本語を教室等で学ぶことができる体制は必要である。しかし、そうした「教わる」という受動的な学びだけでなく、自分が選んだ「文字を書く」という主体的な活動の場を提供することの意義は大きい。また、若い日本人学生と会話し交流を楽しめる対話的活動の機会を増やすことも重要であると考えている。そのためにWi-Fi環境の整備を進められ、例えば平日の就業後の20~30分間、オンラインで大学生と会話できるようなシステムの構築もご検討いただいて、引き続き、よりよい形で貢献していきたい。

6. 地域からの評価

焼津市では、本年度、様々な国籍の人々が互いの文化を理解し、対等な関係を築き、地域社会の一員として生きていくための多文化共生の地域づくりのための「焼津市多文化共生推進計画」を策定しています。この中で「文化交流の場の創出」を基本施策の一つと掲げており、今回のコンソーシアム事業は、多文化共生の推進につながるものと考えます。

今回はコロナ禍で、WEBでの交流という制約の中、大学生の創意工夫で、外国人技能実習生、外国人児童生徒と大学生の有意義な交流ができました。特に外国人児童生徒が楽しそうに字を書いている姿が印象的でした。市としても「WEBを活用した交流」について新たな可能性を感じることができました。また、大学生のみなさんについては、多文化共生を考えるきっかけとなりましたら幸いです。

今後、対面での交流が可能となりましたら、杉崎ゼミのみなさんとあらためて、「書」を活用した交流ができればと思いますので、引き続きご協力のほどよろしくお願いいたします。

¹ 書道体験イベント「ために書く」五風来館 平成25年10月27日、書道展「ために書く」静岡県コンベンションアーツセンターグランシップ 平成26年1月10日(金)~12日(日)、書道体験イベント「ともに書く」静岡大学教育学部A棟書道室平成26年6月7日、書道展「ともに書く」しずぎんギャラリー四季 平成26年6月19日~25日 他

² 杉崎哲子「静岡大学地域連携プログラム「想いや願いを筆に込めて」—その成果と課題—」『静岡大学生涯学習教育研究』第15号(静岡大学社会連携推進機構地域連携生涯学習部門) pp. 17~26 平成25年3月

³ 杉崎哲子、上村一成、竹下哲之「書字支援による心の解放」『静岡大学教育実践総合センター紀要』第24号 平成27年3月 pp. 183~192 他